

機能看護学における看護実践研究の成果と意義

両羽 美穂子 橋本 麻由里 北山 三津子 田辺 満子

The Outcomes and the Significance of Nursing Practice Research for Management in Nursing

Mihoko Ryoha, Mayuri Hashimoto, Mitsuko Kitayama and Michiko Tanabe

● 要旨 ●

筆者らが研究科博士前期課程特別研究の指導教員として関わった機能看護学における看護実践研究の成果を明らかにし、機能看護学における看護実践研究の意義を検討することを目的とする。本研究における看護実践研究の成果とは、研究科修士論文の目的である看護実践の現状の改革・改善がみられた事象とする。

筆者らが機能看護学特別研究の主旨として担当し、平成 27 年度から平成 29 年度に提出された修士論文 8 本を研究対象とした。看護実践研究の成果の定義に基づいて、対象論文の取り組みの成果を評価した。看護実践研究の成果は、機能看護学の主要概念と照合し、意味内容の類似性により分類整理した。

看護実践研究の成果は、【組織内役割の明確化】【振り返りや検討のための機会の設置】【人材育成のあり方・方法の明確化】【目指す看護のあり方の明確化】【役割発揮のための組織体制整備】【目指す看護の実現に向けた仕組みの整備】【連携のあり方・方策の明確化】【理念を具現化する組織の形成】【マネジメント活動の推進】【多職種チーム医療の推進】であった。

機能看護学における看護実践研究の意義は、看護の専門性を高める人材育成、看護の専門機能の追究・発展等の主要概念における課題を追究することで、データに基づいた組織内役割や組織に合った取り組み方法を明確化し、仕組みや体制を整備し、活動を推進することである。

キーワード：機能看護学，看護実践研究，看護実践の改革・改善

I. はじめに

岐阜県立看護大学大学院看護学研究科（以下、研究科とする）では、個人の尊厳と人権の尊重を基盤に据えた利用者中心のケアのあり方を追究し、広い視野から看護実践の改革を積極的に推進できる創造的・先駆的指導者層の育成を目指している。博士前期課程に課される修士論文では、看護実践の現状を改革・改善することを目的に、

看護実践研究の手法を用いて、看護実践現場の課題解決に向けて取り組み、そのプロセスと成果を詳細に記述している。看護実践研究は、その構成要素として 6 つ挙げられ（大川，2017）、【現状分析から導かれた課題】に対し、【職場での立場を踏まえた組織的取り組み】を進め、【利用者ニーズを基盤とした実践改善】につなげている。実践科学としての看護は、事象をあるがままに記述、説明、予測するだけでは十分ではなく、ある現象を引き起こすことを期待されている（南，2017）。すなわち、研究的取り組みにおいても、利用者に

受付日：2021年1月4日 受理日：2021年1月15日
岐阜県立看護大学 Gifu College of Nursing

とってより良い成果をもたらす必要があり、利用者ニーズを基盤に、過去の取り組み事例等から成果のある看護実践方法を導き、改善に向けて組織的に取り組み、その結果として利用者へよりよい看護が提供されることが必要であると考え。また、看護実践には、エビデンスに基づく実践（Evidence Based Practice 以下、EBP とする）（Cullen 他、2018）が求められている。EBP を実装するための戦略には、「気づきと関心の創造」「知識とコミットメントの構築」などの4段階、および「スタッフへのアプローチ」「組織的サポートの構築」の2つの軸がある。これらは、看護実践研究の特質（大川、2020）との類似点も多い。その特質の1つには、＜利用者主体の看護の具現化に向けた実践の振り返りや学習の積み重ねによる実践者の意識改革と組織づくり＞がある。“実践の振り返り”は、実践研究の特性としても説明されている（黒江他、2020）。この“実践の振り返り”によって暗黙知を言語化し、それが根拠となって看護実践の改善につながるため、看護実践研究は、根拠に基づく実践を導くものであると考える。しかし、看護実践者が所属する組織において、研究者としての側面も同時に持ちながら取り組む看護実践研究は、研究によって得られた知識の一般化を目的とする従来の研究とは異なる側面があり、研究手法の一つとして十分に認識され、活用されているとは言えず、確立が急がれる。

研究科においては、平成16年の研究科開設時から看護実践研究に取り組み、試行錯誤しながらも、看護実践の改革・改善に向けて一貫して進めてきた経緯がある。岐阜県立看護大学看護学部および研究科における看護学は、地域基礎看護学領域、機能看護学領域、育成期看護学領域、成熟期看護学領域の4領域から構成され、取り組む課題にそれぞれ特徴をもっている。看護基礎教育において基礎的学修科目に位置づく機能看護学領域は、看護の専門性を高めるマネジメント能力向上のための人材育成や、専門職機能の特質に相応しい看護サービスの提供体制、看護組織のあり方を追究する専門領域であり、より質の高い看護実践を可能とする人やシステム等に焦点をあてていることを特徴とする。看護実践の改革・改善の目

標としては、①一人ひとりがよい看護をする、②組織としてよい看護をする、③生涯にわたり成長し続ける人材となる、ことである。

そこで、本研究は、筆者らが研究科博士前期課程特別研究の指導教員として関わった機能看護学における看護実践研究の成果を明らかにし、機能看護学における看護実践研究の意義を検討することを目的とする。本研究における看護実践研究の成果とは、研究科修士論文の目的である看護実践の現状の改革・改善がみられた事象と定義する。看護実践研究の成果を確認した上で、看護実践研究の意義を機能看護学的視座から説明していくことにより、看護実践研究の発展の一助としたい。

Ⅱ. 方法

1. 対象

筆者らが機能看護学特別研究の主旨導として担当し、平成27年度から平成29年度に提出された修士論文8本を研究対象とした。

2. 分析方法

1) 当該修士論文から、看護実践上の課題、目指す看護や看護師像、研究課題、研究担当者の立場、研究活動として新たに加わった仕組み（記録様式や会議体など）や創造または充実したシステム等、改善したことを整理した。

2) 看護実践上の課題、目指す看護や看護師像、研究課題の3つより、看護実践の改革・改善に向けた課題を読み取り、意味内容の類似性により分類整理した。

3) 論文ごとに、看護実践上の課題、改善したこと、研究活動として新たに加わった仕組みや創造または充実したシステム等から、看護実践研究の成果の定義に基づいて、取り組みの成果を評価した。

4) 看護実践研究の成果は、機能看護学の主要概念と照合し、意味内容の類似性により分類整理した。

機能看護学の主要概念（以下、主要概念）は、以下に示すA～Fである。主要概念は、機能看護学特論Ⅰおよび機能看護学特論Ⅱにおける目標および内容から抽出した。

A 看護の専門性を高める人材育成

- B 看護の専門機能の追究・発展
- C 専門職機能の特質に相応しい看護サービス提供体制の改善・充実
- D 理念を追求し、看護の質を保証する看護組織づくり
- E 看護の質を保証するマネジメント活動の展開・充実
- F 多職種チームの体制づくり

3. 倫理的配慮

修士論文の著者に、本研究の目的等について、文書および口頭で説明し、自由意思による同意を得て実施した。本研究については、岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承認（承認番号 0224、承認年月：平成 30 年 9 月）を得た。

Ⅲ. 結果

以下、分類名を【 】で示す。

1. 看護実践の改革・改善に向けた課題

看護実践の改革・改善に向けた課題は、表 1 に示すとおり 4 つに分類でき、【チームによる看護の充実】【部署間連携による看護の充実】【組織的役割を活用した看護の充実】【目指す看護を実践できる人材育成】であった。【チームによる看護の充実】は、論文 2、6、7、【部署間連携による看護の充実】は論文 8、【組織的役割を活用した看護の充実】は、論文 1、4、【目指す看護を実践できる人材育成】は、論文 3、5 であった。

2. 看護実践研究の成果

看護実践の改革・改善に向けた課題ごとに改善できたことを一部例に挙げ、看護実践研究の成果について説明する。以下、表 1 にある記述を「」で示す。

1) チームによる看護の充実

論文 6 では、「ケースカンファレンス時に患者・家族のニーズ把握が不十分な場合があったり、ケースカンファレンスでの助言が看護過程に反映されていないことがあった」ことを看護実践上の課題として捉えていた。目指す看護は、「患者・家族が願うその人らしい生活の回復に向けて、患者・家族のニーズに添った看護をチームで提供する」であり、「患者・家族のニーズに添った看護の充実に向けたチームづくり」を研究課題として、「主任看護師」の立場で取り組んだ。新たに

加わった仕組みや創造または充実したシステム等は、「ニーズに添った看護を視点としたケースカンファレンスや、チームで目指す看護を実践するためのチームの課題やその解決を話し合う検討会を実施した」ことであった。改善したことは、「患者のニーズに添った看護を実践するための課題を明確にし、チームで課題解決に取り組むことができた」、「ケースカンファレンスを開催し、患者・家族のニーズの確認、ニーズに添った看護プランの立案、実践について検討、共有することで、チームを意識した看護実践へと変化した」であった。この取り組みにおける看護実践研究の成果は、「患者・家族のニーズに添った看護に関する課題の明確化」と「リーダー会、病棟カンファレンス、ケースカンファレンスを活用し、チーム全体で課題に取り組む仕組みを充実」であったと評価した。

その他、論文 2 では、「患者の個別性を重視した看護に重要となることを明確化」と「看護師間で患者の理解を深めるための事例検討会の定例化」が確認できた。論文 7 では、「ケアパスを作成し、患者の目標を共有し、多職種間で役割発揮できる仕組みを整備」と「患者の QOL の向上を目指した自立支援の方法を多職種間で検討していくためのツールづくりとカンファレンスの充実」が確認できた。

2) 部署間連携による看護の充実

論文 8 では、「手術室看護師による術前訪問件数が多くなったが、患者の不安緩和の目的を見失っていたり、病棟看護師との看護の継続に活かされていない状況があった」ことを看護実践上の課題として捉えていた。目指す看護として、「手術療法を受ける患者が、元の生活に戻るうえで影響が予測される身体的機能変化やそれに対する患者および家族の思いを視野に入れた継続した看護を提供する」をかねて、「継続した看護を提供するための手術室と病棟の連携を推進する取り組み」を研究課題として、「スタッフ看護師」の立場で取り組んだ。新たに加わった仕組みや創造または充実したシステム等は、「術前訪問を行った患者・家族への聞き取り調査結果をもとにした部署での検討会、手術や術後の身体的変化や生活の変化に関して不安があった患者を対

象とした事例検討会を開催した」ことであった。改善したことは、「患者および家族の思いを把握し、それらを基に手術室看護師間で必要な援助や連携を推進するための方策について検討した結果、記録の充実や病棟との連携を視野に入れた手術室看護のあり方を見直すことができた」であった。この取り組みにおける看護実践研究の成果は、「手術室として必要な看護を明確化し、手術室看護師の役割を拡大」と「手術室と病棟における看護の継続を目指した連携を推進する方策の明確化」であったと評価した。

3) 組織的役割を活用した看護の充実

論文1では、「患者一人ひとりへの感染予防対策は、リンクナースや現場の看護師任せとなっており、組織的な役割を果たすことができず、院内感染が発生してからへの対応となっていた」ことを看護実践上の課題として捉えていた。目指す看護として、「院内感染症の発生や拡大を予防するためには、病棟看護師が早期に患者の感染リスクをアセスメントし、感染予防を踏まえた看護ケアを提供する予防行動が重要である」と考え、「看護師の感染対策における予防行動の質向上を目指した取り組み」を研究課題として、「認定看護師」の立場で取り組んだ。新たに加わった仕組みや創造または充実したシステム等は、「モデル病棟とリンクナース会での振り返り事例検討会、及び入院事例カンファレンスを実施し、事例検討会やカンファレンスで確認した感染対策マニュアルの課題をリンクナースと共有し改正した」ことであった。改善したことは、「感染対策に必要な予防行動を具体的に確認することができ、実施できた」ことと「根拠をもってマニュアルを改訂し、活用できるものに改善できた」であった。また、「必要な感染対策が看護計画にあがるようになり、看護師の意識も変化してきた」であった。この取り組みにおける看護実践研究の成果は、「感染対策に関わるリンクナースの役割の明確化」、「事例検討会など、実践を振り返ったり、役割等を検討する機会の設置」、「看護における感染予防行動の明確化」、「リンクナースの役割を発揮できるように、感染予防行動を組織的に行う体制を整備」であったと評価した。

その他、論文4では、「退院支援にかかわった

事例検討により、人材育成の機会を設置」、「退院支援におけるリンクナースの役割の明確化」、「急性期病院における地域との連携のあり方を明確化」、「退院支援の仕組みを整備」が確認できた。

4) 目指す看護を実践できる人材育成

論文5では、「看護部では、目標管理、キャリア開発ラダーシステム、院内外の研修の3つの方法で看護師教育を実施する体制をとっているが、看護師がこの体制を十分活用できていない。また、看護部は、看護師が自律的にキャリア開発することを理念としているが、自律的なキャリア開発を支援する方法が明確になっていない」ことを看護実践上の課題として捉えていた。目指す看護師像は、「最も身近でOJTを実施する役割を担う看護係長と共に課題解決の取り組みを通じて看護師が専門職として自律して看護実践能力の向上を目指せるようにする」であり、「病院組織における看護師の自律的な実践能力向上のための教育・支援方法の充実」を研究課題として、「中間看護管理者」の立場で取り組んだ。新たに加わった仕組みや創造または充実したシステム等は、「質問紙調査結果をもとに、師長・係長・教育委員会で検討して課題・方策を明確にし、その方策に従い実践した」と「係長が各職場で対象を決めてOJTを計画・実施・評価すること、さらにそれを係長会で振り返り評価する体制を作った」ことであった。改善したことは、「各職場の教育担当者である研修委員は、看護師個別にOJTを実施・評価したことによって、看護師の目標を共有することの意義を理解し、支援のあり方を深く考えることができた。これにより、研修委員の自律を促すことに繋がったと考えられた。また、研修委員の相談資源として、研修課が認識された」。この取り組みにおける看護実践研究の成果は、「研修委員が看護師の自律を念頭においた育成支援の姿勢を獲得」と「看護部の理念である自律的なキャリア開発に向けて、教育委員会や研修委員会等による組織的な取り組みの活性化」であると評価した。

その他、論文3では、「主任会において、看護のあり方を共有し、人材育成における主任の役割を明確化」、「主任が自身の役割遂行においてPDCAを運用できるように、主任会において実

表 1 看護実践の改革・改善に向けた課題と論文ごとの整理

看護実践の改革・改善に向けた課題	看護実践上の課題	目指す看護や看護師像	研究課題	研究担当者の立場
	病棟看護師は、プライマリーとして担当している患者の個々の問題を考え、患者や家族の思いを取り入れながら余地よいケアを提供したいという思いで看護にあたっている。しかし、実践の場でその思いを共有し、意見交換する機会が持てていない	患者を支える家族を含めた患者の個性を十分に捉えてチームで看護を実践する	患者の個性を重視した看護実践を推進するための取り組み	リーダー 看護師
チームによる看護の充実	ケースカンファレンス時に患者・家族のニーズ把握が不十分な場合があったり、ケースカンファレンスでの助言が看護過程に反映されていないことがあった	患者・家族が願うその人らしい生活の回復に向けて、患者・家族のニーズに添った看護をチームで提供する	患者・家族のニーズに添った看護の充実に向けたチームづくり	主任 看護師
	入院患者は高齢者が多く、発症や入院をきっかけにADLが低下し、元の生活に戻ることが困難になることが多かった。また、チームでの取り組みになっていなかった	治療による行動制限からADLが低下した入院患者の自立支援を行うことで、患者・家族の希望を叶え、QOLの向上を目指す	自立支援により患者のQOL向上を目指したチーム活動の充実	スタッフ 看護師
部署間連携による看護の充実	手術室看護師による術前訪問件数が多くなったが、患者の不安緩和の目的を見失っていたり、病棟看護師との看護の継続に活かされていない状況があった	手術療法を受ける患者が、元の生活に戻るうえで影響が予測される身体的機能変化やそれに対する患者および家族の思いを視野に入れた継続した看護を提供する	継続した看護を提供するための手術室と病棟の連携を推進する取り組み	スタッフ 看護師
	患者一人ひとりへの感染予防対策は、リンクナースや現場の看護師任せとなっており、組織的な役割を果たすことができず、院内感染が発生してから対応となっている	院内感染症の発生や拡大を予防するためには、病棟看護師が早期に患者の感染リスクをアセスメントし、感染予防を踏まえた看護ケアを提供する予防行動が重要である	看護師の感染対策における予防行動の質向上を目指した取り組み	認定 看護師
組織的役割を活用した看護の充実	急性期病院の看護師は、退院時の患者の状況を見据え早期に退院支援を開始できるようにしていく必要があるが、退院支援を推進するリンクナースのリーダーシップが発揮できず、退院支援が十分できていなかった	退院時の患者の状況を見据えた退院支援を早期から開始することで、急性期病院としての機能を果たし、地域と連携できるようにする	急性期病院における地域につなぐ看護の充実に向けた人材育成	看護 管理者
	一人ひとりの暮らしに合った療養生活を送るための課題について、必要な情報収集や計画の立案による、看護過程の展開がなされていない	看護部理念である「その人らしさを尊重した看護・介護の提供」を目指し、病棟看護師がその人らしさを尊重した看護の継続を図れるようにする	その人らしさを尊重した看護の継続に向けた人材育成	看護 管理者
目指す看護を実践できる人材育成	看護部では、目標管理、キャリア開発ラダーシステム、院内外の研修の3つの方法で看護師教育を実施する体制をとっているが、看護師がこの体制を十分活用できていない。また、看護部は、看護師が自律的にキャリア開発することを教育理念としているが、自律的なキャリア開発を支援する方法が明確になっていない	最も身近でOJTを実施する役割を担う看護係長と共に課題解決の取り組みを通じて看護師が専門職として自律して看護実践能力の向上を目指すようにする	病院組織における看護師の自律的な実践能力向上のための教育・支援方法の充実	中間看護 管理者

新たに加わった仕組みや 創造または充実した システム等	改善したこと	看護実践研究の成果	論文番号
患者の個別性を重視したケアを 実践するための事例検討会開催 に関する検討を行い、定期的な 事例検討会を実施した。実践後 の患者・家族への聞き取りをもと に、さらにケアの振り返りを促進 するよう病棟看護師にかかわった	事例検討会により、患者の個別性を重視 した看護を行うために重要となることを 明確にできた 事例検討会の方針を決定し、11事例17回 の事例検討会を実施した。この事例検 討会を定着させていくための方策を明ら かにすることができた	患者の個別性を重視した看護に重要となること を明確化 看護師間で患者の理解を深めるための事例検討 会の定例化	2
ニーズに添った看護を視点とし たケースカンファレンスや、チーム で目指す看護を実践するための チームの課題やその解決を話し 合う検討会を実施した	患者のニーズに添った看護を実践するた めの課題を明確にし、チームで課題解決 に取り組むことができた ケースカンファレンスを開催し、患者・家 族のニーズの確認、ニーズに添った看護 プランの立案、実践について検討、共有 することで、チームを意識した看護実践 へと変化した	患者・家族のニーズに添った看護に関する課題 の明確化 リーダー会、病棟カンファレンス、ケースカンファ レンスを活用し、チーム全体で課題に取り組む仕 組みを充実	6
多職種チームで取り組めるよう情 報共有ツールとなるケアパスを作 成し、実践に活用できるようにした	多職種チームで目標と情報を共有できる ツールの作成により、発症前のADLや対 象者および家族の希望を踏まえた目標を 設定ができるようになり、家族間や多職 種間の調整の必要性を認識し支援が充 実した	ケアパスを作成し、患者の目標を共有し、多職種 間で役割発揮できる仕組みを整備 患者のQOLの向上を目指した自立支援の方法を 多職種間で検討していくためのツールづくりとカン ファレンスの充実	7
術前訪問を行った患者・家族へ の聞き取り調査結果をもとにした 部署での検討会、手術や術後の 身体的変化や生活の変化に関し て不安があった患者を対象とし た事例検討会を開催した	患者および家族の思いを把握し、それら を基に手術室看護師間で必要な援助や 連携を推進するための方策について検討 した結果、記録の充実や病棟との連携を 視野に入れた手術室看護のあり方を見 直すことができた	手術室として必要な看護を明確化し、手術室看 護師の役割を拡大 手術室と病棟における看護の継続を目指した連 携を推進する方策の明確化	8
モデル病棟とリンクナース会での 振り返り事例検討会、及び入院 事例カンファレンスを実施し、事 例検討会やカンファレンスで確認 した感染対策マニュアルの課題 をリンクナースと共有し改正した	感染対策に必要な予防行動を具体的に 確認することができ、実施できた 根拠をもってマニュアルを改訂し、活用 できるものに改善できた 必要な感染対策が看護計画にあがるよ うになり、看護師の意識も変化してきた	感染対策に関わるリンクナースの役割の明確化 事例検討会など、実践を振り返ったり、役割等を 検討する機会の設置 看護における感染予防行動の明確化 リンクナースの役割を発揮できるように、感染予 防行動を組織的に行う体制を整備	1
現状の課題認識の共有、退院支 援ポイントの明確化と退院支援 ガイド作成支援。退院支援の実 践概要を支援ポイントに沿って記 録し資料提示したうえで、患者病 態像別にグループで事例検討会 を開催した。最後に実践活動を 評価した	退院支援ガイドをもとに実践した事例を 用いてリンクナース会で振り返り、共有す ることにより、リンクナースの役割が明確 になり役割意識が向上した リンクナースがモデル的人材となりスタッ フを支援することにつながった 退院支援ガイドを用いた退院支援を評 価し、特徴的な事例ごとに急性期病院と 地域との連携のあり方について提言した	退院支援にかかわった事例検討により、人材育 成の機会を設置 退院支援におけるリンクナースの役割の明確化 急性期病院における地域との連携のあり方を明 確化 退院支援の仕組みを整備	4
質問紙調査により明らかにした各 病棟の看護の課題に対し、各病 棟ごとに取り組むの方法を病棟 看護師とともに検討して決定し、 実践し、振り返りを行った。これ らの一連の活動を主任会におい て検討し振り返り、めざす実践に つなげた	主任会による事例検討や、各病棟の課 題に応じた取り組み状況の共有等から、 主任としての役割を認識し、主任の役割 を具体的な行動レベルにすることで、受 け持ち看護師に計画的に指導を行うこ とができ、病棟において看護の振り返り の機会を継続的に持つことができるよう になった	主任会において、看護のあり方を共有し、人材育成 における主任の役割を明確化 主任が自身の役割遂行においてPDCAを運用でき るように、主任会において実践の振り返りの機会を 設置 病棟看護師一人ひとりが、理念に掲げる看護を継続 していくための組織を形成 部署の中間看護管理者が自身の役割遂行におい てPDCAサイクルを運用できるように委員会等を活 性化	3
質問紙調査結果をもとに、師長・ 係長・教育委員会が検討して課 題・方策を明確にし、その方策に 従い実践した 係長が各職場で対象を決めて OJTを計画・実施・評価するこ と、さらにそれを係長会で振り返 り評価する体制を作った	各職場の教育担当者である研修委員は、 看護師個別にOJTを実施・評価したこと によって、看護師の目標を共有することの 意義を理解し、支援のあり方を深く考え ることができた。これにより、研修委員の 自律を促すことに繋がったと考えられた。 また、研修委員の相談資源として、研修課 が認識された	研修委員が看護師の自律を念頭においた育成支 援の姿勢を獲得 看護部の教育理念である自律的なキャリア開発 に向けて、教育委員会や研修委員会等による組 織的な取組みの活性化	5

践の振り返りの機会を設置」、「病棟看護師一人ひとりが、理念に掲げる看護を継続していくための組織を形成」、「中間管理職が自身の役割遂行においてPDCAサイクルを運用できるように委員会等を活性化」が確認できた。

3. 機能看護学の主要概念から見た看護実践研究の成果

看護実践研究の成果は、表2のとおり機能看護学の主要概念であるA～Fのいずれかに該当していた。

【組織内役割の明確化】、【振り返りや検討のための機会の設置】、【人材育成のあり方・方法の明確化】は、A看護の専門性を高める人材育成に関する成果であった。【組織内役割の明確化】には、「感染対策に関わるリンクナースの役割を明

確化」等があった。

【振り返りや検討のための機会の設置】には、「事例検討会など、実践を振り返ったり、役割等を検討する機会の設置」等があった。【人材育成のあり方・方法の明確化】には、「研修委員が看護師の自律を念頭においた育成支援の姿勢を獲得」があった。

【目指す看護のあり方の明確化】は、B看護の専門機能の追究・発展に関する成果であった。【目指す看護のあり方の明確化】には、「看護における感染予防行動の明確化」や「患者の個別性を重視した看護に重要となることを明確化」等があった。

【役割発揮のための組織体制整備】、【目指す看護の実現に向けた仕組みの整備】、【連携のあり

表2 機能看護学の主要概念との照合

機能看護学の主要 概念	分類	看護実践研究の成果	論文 番号
A 看護の専門性を 高める 人材育成	組織内役割の明確化	感染対策に関わるリンクナースの役割を明確化	1
		主任会において、看護のあり方を共有し、人材育成における主任の役割を明確化	3
		退院支援におけるリンクナースの役割を明確化	4
	振り返りや検討のための機会の設置	事例検討会など、実践を振り返ったり、役割等を検討する機会の設置	1
		主任が自身の役割遂行においてPDCAを運用できるように、主任会において実践の振り返りの機会を設置	3
		退院支援にかかわった事例検討により、人材育成の機会を設置	4
	人材育成のあり方・方法の明確化	研修委員が看護師の自律を念頭においた育成支援の姿勢を獲得	5
B 看護の専門機能 の追究・発展	目指す看護のあり方の明確化	看護における感染予防行動の明確化	1
		患者の個性を重視した看護に重要となることを明確化	2
		患者・家族のニーズに添った看護に関する課題の明確化	6
		手術室として必要な看護を明確化し、手術室看護師の役割を拡大	8
	役割発揮のための組織体制整備	リンクナースの役割を発揮できるように、感染予防行動を組織的に行う体制を整備	1
		看護師間で患者の理解を深めるための事例検討会の定例化	2
C 専門職機能の特 質に相応しい看護 サービス提供体制 の改善・充実	目指す看護の実現に向けた仕組み の整備	退院支援の仕組みを整備	4
		リーダー会、病棟カンファレンス、ケースカンファレンスを活用し、チーム全体で課題に取り組む仕組みを充実	6
		ケアパスを作成し、患者の目標を共有し、多職種間で役割発揮できる仕組みを整備	7
	連携のあり方・方策の明確化	急性期病院における地域との連携のあり方の明確化	4
		手術室と病棟における看護の継続を目指した連携を推進する方策の明確化	8
		病棟看護師一人ひとりが、理念に掲げる看護を継続していくための組織を形成	3
	D 理念を追求し、 看護の質を保証す る看護組織づくり	理念を具現化する組織の形成	看護部の教育理念である自律的なキャリア開発に向けて、教育委員会や研修委員会等による組織的な取組みの活性化
E 看護の質を保証 するマネジメント 活動の展開・充実			マネジメント活動の推進
F 多職種チームの 体制づくり	多職種チーム医療の推進	患者のQOLの向上を目指した自立支援の方法を多職種間で検討していくためのツールづくりとカンファレンスの充実	7

方・方策の明確化】は、C 専門職機能の特質に相応しい看護サービス提供体制の改善・充実に関する成果であった。【役割発揮のための組織体制整備】には、「リンクナースの役割を発揮できるように、感染予防行動を組織的に行う体制を整備」があった。【目指す看護の実現に向けた仕組みの整備】には、「看護師間で患者の理解を深めるための事例検討会の定例化」等があった。【連携のあり方・方策の明確化】には、「手術室と病棟における看護の継続を目指した連携を推進する方策の明確化」等があった。

【理念を具現化する組織の形成】は、D 理念を追求し、看護の質を保証する看護組織づくりに関する成果であった。【理念を具現化する組織の形成】には、「病棟看護師一人ひとりが、理念に掲げる看護を継続していくための組織を形成」等があった。

【マネジメント活動の推進】は、E 看護の質を保証するマネジメント活動の展開・充実に関する成果であった。【マネジメント活動の推進】には、「部署の中間看護管理者が自身の役割遂行において PDCA サイクルを運用できるように委員会等を活性化」があった。

【多職種チーム医療の推進】は、F 多職種チームの体制づくりに関する成果であった。【多職種チーム医療の推進】は、「患者の QOL の向上を目指した自立支援の方法を多職種間で検討していくためのツールづくりとカンファレンスの充実」があった。

IV. 考察

機能看護学の主要概念における看護実践研究の意義として、看護実践の現状の改革・改善を導く理由について考察する。

1) 看護の専門性を高める人材育成

看護の専門性を高める人材育成に関して、【組織内役割の明確化】【振り返りや検討のための機会の設置】【人材育成のあり方・方法の明確化】の3つの看護実践研究の成果が確認できた。

【組織内役割の明確化】は、主任やリンクナースの役割について明確化する内容であった。組織には、組織の目的を達成するための役割分担が行われ、役割を分業することにより権限移譲がなさ

れ、責任の所在や範囲が明確になる。人は、新しい役割を担う際には、未経験であることから不安や抵抗感を抱きやすいと思われるが、役割受容できると自尊感情が高くなる（長田, 2017）。役割の明確化は、役割受容のために必要であり、組織における自分自身の立ち位置や貢献の方向性を見出すことによって、自己を肯定し役割遂行に拍車がかかるのではないかと考える。しかし、組織内役割については、明文化されていないことも多く、看護実践研究を通して役割を明確化できたことは、組織および担当者個人がその役割を認識することとなり、組織の一員としての役割遂行により、組織活動が活性化していくと考える。

【振り返りや検討のための機会の設置】は、主任会や事例検討会を意図的に運営し、看護実践を振り返る機会としたり、役割を検討する機会とする内容であった。看護実践研究には、研究者自身の実践者としての内省を導くプロセスがある（黒江他, 2014）。看護の協働実践者かつ研究協力者である関係者間で、看護実践を振り返ったり、検討していく機会を持つことで、共に実践についての理解を深め、実践の置かれている状況を確認し、よりよい実践へと変容させていくことを可能とすると考える。これらの機会を研究的プロセスに意図的に組み込むことにより、振り返りや検討された内容の詳細が整理され、看護の本質を導くと同時に、これらの機会の有効性についても実感でき、研究終了後も継続的に取り組む足掛かりとなっていくと考える。

【人材育成のあり方・方法の明確化】は、OJT（On-the-Job Training）のあり方・方法を追究した内容であった。看護実践能力を高めるには、Off-JT（Off-the-Job Training）と OJT のスパイラル学習が必要である（厚生労働省, 2014）。OJT は、臨床現場で指導者との直接的ななかかわりによる体験的、現実的な教育である（高屋, 2016）が、指導者個々の自由度が高く、課題も多いと推察される。このため、組織的に OJT のあり方や方法を検討することにより、組織が目指す看護師像に向けて組織的に合意した方法による人材育成として、より効果的な方法を導き、人材育成の取り組みを改善していくことができると考える。

2) 看護の専門機能の追究・発展

看護の専門機能の追究・発展では、【目指す看護のあり方の明確化】が看護実践研究の成果として確認できた。

【目指す看護のあり方の明確化】は、看護として必要な行動を明確化した内容や、組織やチームとして目指す看護を明確化した内容であった。前者は、研究の過程において、過去事例を用いた検討会に取り組み、必要な行動を過去事例から確認し、マニュアルに反映させることができた。後者では、日々行っている看護実践をケースカンファレンス等で振り返り、目指す看護を意識しながら看護実践を評価していた。これらの取り組みは、研究担当者が看護実践者だからこそタイムリーに行うことができる方法であり、常にPDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルを回しながら、現状を点検し、目指す方向へ改善することができていた。ケースカンファレンスは、人材育成の意味があり、互いに知識や経験を伝えあい、意味を認め合うことが、看護師相互の成長・発展を促進することにつながっていく（橋本，2009）。そのため、看護実践研究における研究的取り組みではあったが、共に看護を実践する者同士が意見交換する中で、相互の価値観の共通点や相違点を理解しながら、目指す看護のあり方を明確化していくことは、利用者によりよい実践を提供することに加えて、ケースカンファレンスに参加する実践者にとっても、教育的な機会やチームビルディング等の多くの意義を見出すことができると考える。しかし、看護の専門機能の発展に関する成果は確認できなかったため、看護実践研究をさらに進め、今後確認していく必要がある。

3) 専門職機能の特質に相応しい看護サービスの提供体制の改善・充実

専門職機能の特質に相応しい看護サービスの提供体制の改善・充実では、【役割発揮のための組織体制整備】【目指す看護の実現に向けた仕組みの整備】【連携のあり方・方策の明確化】の3つの成果が確認できた。

【役割発揮のための組織体制整備】は、組織内で共通認識した役割について、その発揮を促進するために、組織的に取り組む体制を整備する内容であった。今回成果が明らかになった修士論文で

は、研究担当者の立場は認定看護師であり、組織横断的な活動を行っている立場であった。認定看護師の役割は3つあり、その1つが指導である（日本看護協会）。しかし、すべての看護職を対象に直接指導を行うことは難しく、認定看護師が専門的実践を行うには、リンクナースの存在が影響している（休波，2014）。そのため、リンクナースの役割を明確化した上で、組織的に役割遂行できるように体制を整備していくことにより、認定看護師の専門的実践を強化し、組織全体として看護の充実に寄与できると考える。これらの取り組み過程において看護実践研究の手法をとることにより、看護の充実に向けた取り組みとその成果を研究データとすることができ、取り組みの成果を実証することにつながる。

【目指す看護の実現に向けた仕組みの整備】は、ケアパスのようなツールや事例検討会・リーダー会のような会議体を活用して、目標や情報を共有したり検討したりする仕組みをつくる内容であった。目指す看護の実現に向けて組織的に取り組むには、仕組みが必要である。ケアパスは、多職種チームにおいてそれぞれの職種が役割発揮していくためのツールであり、これにより利用者の思いを共有し、共通の目標設定へとつながる仕組みであった。事例検討会やリーダー会は、意図的に目指す看護を検討していくための仕組みであった。看護実践研究は、いわゆる研究であるため、研究協力者の同意を得て行うこととなる。会議体等は、通常の組織の仕組みであるため、研究協力の有無にかかわらず実施されるが、形骸化していたり、検討の場になっていないこともある。そのため、研究という取り組みをプラスすることで、目的を意識した有機的な仕組みとして活性化させ、その成果を言語化する作業を通じて、仕組みの意味を新たに確認する機会になるのではないかと考える。

【連携のあり方・方策の明確化】は、組織内の部署間連携や、病院と地域との連携を推進した内容であった。機能分化が進んでいる現在の医療体制においては、利用者中心の理念のもと、部署間や地域連携により支援していく体制を整えていく必要がある。また、利用者のニーズを早期に確認し、ニーズを満たしていけるように多職種・

多機関と調整し、支援していくことが看護として必要である。看護実践研究では、実践に取り組みながら、連携方法の検討過程や、調整過程を研究データに用い、取り組みの成果を実証した上で、連携のあり方や方策を明確にすることができる。

4) 理念を追求する看護組織のあり方

理念を追求する看護組織のあり方では、【理念を具現化する組織の形成】が成果として確認できた。【理念を具現化する組織の形成】は、組織が目指す看護や看護師像を組織員一人ひとりが意識し、目指す姿に向かって組織的な取り組みとするために、委員会等の仕組みを活性化していく内容であった。広辞苑によると、理念とは、事業・計画などの根底にある根本的な考え方である。また、組織が目指す姿、組織内での共通の価値、組織の使命を示したものであり、組織化（内田，2013）するために必要である。看護実践研究を開始する前にも、組織理念は変わらず掲げられており、委員会等の仕組みは存在していたが、理念との乖離が看護実践上の課題であった。理念を追求するには、組織的な仕組みに加え、仕組みを活性化するための支援が必要であった。看護実践研究の特質には、利用者主体の看護の具現化に向けた実践の振り返りや学習の積み重ねによる実践者の意識改革と組織づくりがある（大川，2018）。機能看護学においては、【理念を具現化する組織の形成】が成果として見出されたように、理念を追求する観点から組織づくりを行っていることが確認できた。これらの取り組み過程を看護実践研究のデータとして詳細に記述し、組織的に活動を推進していく看護組織のあり方を追究することにより、理念を具現化することができ、発展し続ける組織づくりが可能となると考える。つまり、看護組織のあり方を追究するには、何を目指し、どのような仕組みを活用して、あるいは創造して、何に働きかけて組織化するのかを考えた過程におけるデータが必要であり、詳細なデータによりマネジメントサイクルが明確になり、活動を推進する根拠が明示できると考える。

5) 看護の質を保証するマネジメント活動の展開・充実

看護の質を保証するマネジメント活動の展開・充実では、【マネジメント活動の推進】が成果と

して確認できた。【マネジメント活動の推進】は、中間看護管理者として、部署の課題を確認し、主任会において課題への取り組みを検討し振り返る機会をつくり、PDCAによるマネジメントサイクルを運用し、活動を推進した内容であった。マネジメント活動は、効果的・効率的・経済的な成果を生み出すために、意図的に仕組みを創造、あるいは活用しながらマネジメントサイクルを動かす（両羽，2007）ことである。病院看護部の多くは、看護師長および主任等の中間看護管理者が各部署を運営し、看護管理者が各部署を統括して運営する2重構造の体制をとっている。各部署のマネジメント活動を活性化させるためには、PDCAを意図的に運営できるような仕組みが必要であり、研究的取り組みであった質問紙調査のデータに基づいて各部署の課題を明らかにし、課題への取り組みを支援する仕組みとして委員会組織を活用したことにより、2重のマネジメント活動を推進することにつながったと考える。

6) 多職種チームの体制づくり

多職種チームの体制づくりでは、【多職種チーム医療の推進】が成果として確認できた。【多職種チーム医療の推進】は、多職種間で目標および情報を共有するためのケアパスにより、多職種カンファレンスを充実させる内容であった。伊井ら（2011）の研究においても多職種の情報共有ツールの有効性が確認されている。チーム医療を推進する政策によって、多職種による情報共有の必要性については、どの職種も理解が進んでいると思われるが、情報を一元化している電子カルテに記載がなかったり、目標が共有されていないことも多いと推察される。看護実践研究では、その組織の体制や実態から確認した課題に対し、組織に応じた方法を検討し試行していく。新しい仕組みを創造したり活用したりしながら、その過程および成果を研究データとして確認し、根拠をもって改善していくことを後押しすることが可能となると考える。

V. おわりに

本研究では、機能看護学領域において看護実践研究として取り組んだ修士論文8本から、【組織内役割の明確化】等の11の成果が確認できた。

機能看護学における看護実践研究の意義は、看護の専門性を高める人材育成、看護の専門機能の追究・発展等の主要概念における看護実践上の課題を追究することで、データに基づいた組織内役割や組織に合った取り組み方法を明確化し、仕組みや体制を整備し、活動を推進することである。

本研究の対象論文においては、機能看護学の主要概念である看護の専門機能の追究・発展に関する看護実践研究のうち、看護の専門機能の発展に関する成果は確認できなかった。今後はさらに機能看護学領域における看護実践研究を進め、看護の専門機能の発展に関する成果と意義について確認していきたい。その上で、看護実践の改革・改善のプロセスを明らかにし、看護実践研究を踏まえた EBP として説明していくことが今後の課題である。

本研究成果の一部は、看護実践研究学会第 1 回学術集会で発表した。

利益相反について

本研究における利益相反は存在しない。

文献

橋本麻由里. (2009). ケースカンファレンスが OJT として人材育成に果たす意味. 日本看護管理学会誌, 12(2), 53-63.

伊井真由美, 井上敬子, 谷崎紀子. (2011). 多職種チームで活用可能な行動制限のある摂食嚥下患者のケアプラン作成 看護スタッフのグループ討議による検討, 日本精神科看護学会誌, 54(2), 81-85.

厚生労働省. (2014). 新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】. (pp.16-18). 平成 26 年 2 月.

黒江ゆり子, 北山三津子. (2014). 看護実践研究の可能性と意義 その 1. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 157-163.

黒江ゆり子, 大川眞智子, 茂本咲子. (2020). 看護実践研究の哲学的基盤についての試論. 岐阜県立看護大学紀要, 20(1), 99-106.

Cullen Laura 他. (2018) 第 8 章実装. アイオワ大学病院看護研究・EBP・質改善部門 (編), 看護実践の質を改善するための EBP ガイド

ブックアウトカムを向上させ現場を変えていくために (初版). (pp.85-89), ミネルヴァ書房.

南裕子. (2017). 看護における研究の役割. 南裕子, 野嶋佐由美 (編), 看護における研究 (第 2 版) (pp.13). 日本看護協会出版会.

長田ゆき江. (2017). 中堅看護師の職業継続意思に関する研究～役割受容と自尊感情との関連～, 長野赤十字病院医誌, 31, 52-64.

日本看護協会. 認定看護師 (Certified Nurse) とは. 2020-12-30. <https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn>

大川眞智子. (2017). 看護実践研究の特質の明確化に関する研究 その 1 - 看護実践現場の看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質 -. 岐阜県立看護大学紀要, 17(1), 43-54.

大川眞智子. (2018). 看護実践研究の特質の明確化に関する研究 その 2 - 岐阜県立看護大学大学院 (博士前期課程) 修士論文にみられる看護実践研究活動の特質 -, 岐阜県立看護大学紀要, 18(1), 113-124.

大川眞智子. (2020). 看護実践研究の特質の明確化に関する研究 その 3 - 看護実践研究の特質の検証 -. 岐阜県立看護大学紀要, 20(1), 67-79.

両羽美穂子. (2007). 地域づくりにおける保健師のマネジメント活動の特徴, 千葉看会誌, 13(1), 69-76.

高屋尚子. (2016). 卒後の教育. 日本看護管理学会学術活動推進委員会 (編), 看護管理用語集 (第 2 版) (pp.178-179). 日本看護管理学会.

内田宏美. (2016). 組織化. 日本看護管理学会学術活動推進委員会 (編), 看護管理用語集 (第 2 版) (pp.166-167). 日本看護管理学会.

休波茂子. (2014). 認定看護師が認識する感染管理の専門的実践とその影響要因. 日本感染環境学会誌, 29(3), 172-182.

The Outcomes and the Significance of Nursing Practice Research for Management in Nursing

Mihoko Ryoha, Mayuri Hashimoto, Mitsuko Kitayama and Michiko Tanabe

Gifu College of Nursing

● Abstract ●

The purpose of this study was to clarify the outcomes of nursing practice research and discuss its significance for Management in Nursing. The outcomes of nursing practice research in this study were: “defined events in which nursing practice was reformed and improved.” We performed content analyses of eight master's theses from 2015 to 2017 of Management in Nursing. The outcomes of nursing practice research were identified based on this definition. The outcomes of nursing practice research were compared with key concepts of Management in Nursing and classified accordingly.

The outcomes of nursing practice research were classified as: 1) clarification of the role in the organization, 2) establishment of opportunities for reflection and review, 3) clarification of the state and method of human resource development, 4) clarification of the intended state of nursing to be achieved, 5) improvement of the organizational structure for the role, 6) development of a mechanism to achieve nursing goals, 7) clarification of the state and methods of cooperation in striving toward the goal, 8) formation of an organization that supports the target philosophy, 9) promotion of nursing management activities, and 10) promotion of care by multi-disciplinary teams.

Key concepts of Management in Nursing, such as human resource development to enhance nursing professionalism, were identified to clarify the role of the organization, how to achieve nursing professionalism in the organization, establishing processes and systems, and the promotion of nursing management activities based on the data.

Key words: management in nursing, nursing practice research, reformed and improved of nursing practice
